

平成22年5月6日現在

研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2007～2009  
 課題番号：19530168  
 研究課題名（和文） ワルラスとフランスの経済学者たち—一般均衡理論の思想的起源の解  
 研究課題名（英文） Walras in the History of French Economic Thought: the Origin of the General Equilibrium Theory  
 研究代表者  
 御崎 加代子（MISAKI KAYOKO）  
 滋賀大学・経済学部・教授  
 研究者番号：90242362

研究成果の概要（和文）：本研究では、レオン・ワルラスの一般均衡理論の先駆者とされる A.N. イスナールの主著『富論』（1781）を主に取り組み、従来指摘されてきた、ワルラスの主著『純粹経済学要論』との理論的類似性のみを注目するのではなく、その歴史的背景、政策的意図などを改めて検証することによって、社会ヴィジョンにおけるワルラスとイスナールとの決定的違いを明らかにした。これにより一般均衡理論の思想的起源に知らざる一側面を示すことができ、ワルラス経済学の思想的意義はより明確になった。

研究成果の概要（英文）： This research have mainly focused on Isnard's main work *Traité* (1781) and examined not only its possible influences on Walras's pure theory but also its historical ground and policy. Despite their theoretical similarities which had been pointed out by many scholars and Walras himself before, we have clarified that there exists decisive differences between two economists' social vision from the view point of history of economic thought. Thus, we have shown an unknown aspect of the origin of the general equilibrium theory and the significance of Walras's economic thought.

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：経済学 経済学説・経済思想

キーワード：経済学士

## 1. 研究開始当初の背景

私がこれまで取り組んできたワルラス研究は、ワルラスの経済学が、現代経済理論に多大なる影響を与えた純粹経済学（一般均衡理論）だけでなく、未完の体型である応用経

済学や社会経済学をも含む、壮大な社会科学体系であることを手がかりに、その3つの経済学を、可能な限りワルラスの意図に従って、整合的に理解することにより、純粹経済学に新しい光をなげかけようとするものであった。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、レオン・ワルラスの経済学の形成過程を、フランスの経済学史の中で考察することにより、一般均衡理論の思想的起源を明らかにすることである。

ワルラスの一般均衡理論が、様々な分析装置において、先行のフランス経済学者たちたとえばイスナールやクルノーの影響を受けていることは、これまで多くの研究者たちの注目を集めてきた。

本研究は、ワルラスに影響を与えたものとしては、そのような数理経済学者たちの理論だけでなく、彼らの思想的背景やイデオロギーなど多様なフランス社会思想の流れにも注目する点に特徴がある。そのことによって、ワルラス一般均衡理論の理論的形成過程だけでなく、それを支える市場観、方法、そして哲学をも解明し、その歴史的思想的意義を明らかにすることを意図している。

## 3. 研究の方法

(1) フランス経済学史に関わる図書(古書を含む)の購入とその検討

(2) 資料の調査 フランスリヨン第2大学トリアングル研究所ならびにスイスローザンヌ大学ワルラス=パレート研究所ワルラス文庫への出張

(3) 学会報告

(4) ローザンヌ大学ワルラス=パレート研究所でのセミナー報告(英語とフランス語)

(5) 研究論文の執筆と公刊

## 4. 研究成果

(1) 研究史と問題の所在

A.N.イスナールの主著『富論(Traité des richesses)』(1781)は、同時代人からはほとんど評価を受けなかったが、商品の交換価値を方程式によって数学的に表現した部分が、刊行後ほぼ100年たってから、ワルラスやジェヴォンズの注意をひきつけた。そのことがきっかけになって、20世紀の研究者たちは、イスナールを数理経済学者の先駆者として位置づけるようになった。さらにジャップフェが、ワルラスの一般均衡理論へのイスナールの影響を主張するようになり、イスナールは一般均衡理論の先駆者としても、評価を受けるようになった。

確かに、イスナールの『富論』に展開されて

いる議論は、ワルラスの『純粋経済学要論』の内容を彷彿とさせる部分が少なくない。両者の類似性を示すことにより、理論的な連続性を強調することは可能である。ワルラス自身も実際、イスナールの経済理論に高い評価をした。しかし果たしてワルラスがその理論形成過程において、イスナールから直接影響を受けたかどうかは、確証がない。

そこで本研究は、このような理論的視点から少し方向を変えて、イスナールの『富論』とワルラスの『純粋経済学要論』の思想的背景を探り、両者における連続と断絶とを明らかにすることによって、二人の経済思想の意義に、新しい光を投げかけることを目的とする。かつてシュンペーターは『経済分析の歴史』

(1954)において、一般均衡モデルを経済理論史における「マグナカルタ」と位置付け、その形成過程としてのフランス経済学の伝統を語った。経済諸要素の相互依存関係を表現する数理的モデルの形成過程として、ケネーの経済表からワルラスの純粋経済学までの歴史をとらえ、それを貫く一直線上にイスナールもまた位置すると彼はみているのである。

しかし政策的な視点に注目してみると、イスナールの『富論』は、フランス革命前夜の危機的な状況の中で、フィジオクラートの経済学とそれが主張する税制度(土地単一税)を覆して、代替的な理論を示すことを意図して書かれている。それに対して、ワルラスは、フィジオクラートの土地単一税を称賛し、自らの社会経済学における土地国有化論との共通点を見出し、社会経済学の根拠として純粋経済学を構築した。この両者のフィジオクラートへの決定的なスタンスの違いは、二人が共有するとみなされる経済理論にどのように反映されているのか、これを明らかにするのが本研究のねらいである。

イスナールの『富論』が、1878年にワルラスとジェヴォンズによって注目されるまで、この著作は、フィジオクラート批判の書として言及されても、その数学的部分が脚光をあびることはなかった。たとえば、コックラン編『経済学辞典』(1854)におけるJ.A.Blanchi執筆によるイスナールの項目やMcCulloch, J.R.(1845)などがその代表例としてあげられる。20世紀に入ると、Renevier, L.(1909)が、唯一の本格的なイスナールの体系的な研究書となるが、そこでも、数学的方程式の部分に特に重視されているわけではない。ジャップフェは、このような研究方向に批判的で、イスナールを一般均衡理論とワルラス経済学の先駆者として位置づけようとした(Jaffe 1969)。しかしジャップフェの解釈には、疑問も提出されている。Klotz(1994)によれば、イスナールのモデルは一般均衡分析や数理経済学の先駆者と言え

るかもしれないが、本人にその意図はなく、またワルラス自身がその純粋経済学の形成過程において、実際に彼から受けた影響は、父オーギュストを経由した可能性も含めて、皆無だというのである。しかし概して、イスナールを数理経済学の先駆者として位置づける解釈は、20世紀を通じて定着したといえる。このような状況のもと、フィジオクラート批判と言う、イスナールの経済学の本来の意図は、忘れられてしまったかのように思われる。

これに対して、2006年に刊行された、イスナールについての体系的な研究書 van den Berg(2006)は、イスナール研究史にとって新たな方向づけとなるものである。この本は、これまであまり知られていなかったイスナールの生涯についての詳細な記述に始まる。イスナールは、もともとエンジニア・エコノミストであった。彼の経済学はたしかに、土木学校で培った数学の能力なしには成立しなかったであろうが、その着想自体は、エンジニア・エコノミストの伝統の中に位置づけられるものでもなく、デュピュイのように他のエンジニアに影響を与えた形跡もない。著作の多くは、フィジオクラートの影響を受け、当時のフランスの税制度や貨幣制度の改革、風紀の改善といったものがテーマとなっている。彼の経済学を検討するにあたっては、フランス大革命という激動の社会背景、彼自身の社会改革プランなどを十分に考慮する必要があるというのが、この研究書のスタンスである。

主著『富論』も、1770年頃から交流がはじまったフィジオクラートの影響下で書かれたものであった。19世紀の研究者たちがイスナールの『富論』に言及するとき、フィジオクラート批判の書としてであったことから明らかなように、その交換方程式も本来はその文脈で理解されるべきである。イスナールが意図したのは、農業部門だけが生産的であるというフィジオクラートの命題と、それを根拠にした土地単一税を否定することであった。剰余の源泉をすべての部門に一般化し、すべての部門において費用を上回る収入に税をかけることによって、公正で中立かつシンプルな税制度を実現することが彼の目標であった。

また、イスナールがたてた多数商品の交換方程式は、たしかに新しいスタイルではあるが、1760-70年代のフランスにおいては、かなり洗練された価値論争がすでになされており、イスナールはそこから着想を得たというのが van den Berg の解釈である。交換価値は内在的なものではなく、相互依存的、相対的なものであることを発見したのはイスナールではなく、そもそも当時のフランスにおいてはイギリスとはちがって、交換価値の決

定要因を労働などの一元的要素に求めようとするという方向性は存在しなかった。それはフィジオクラートにおいても同様である。イスナールは、このようなフランスの価値論の特徴に、新しい形式を与えた人物だったというのである。

## (2)『富論』の要点

序論に示されているように、本書の意図は、同時代の多くの論者たちが支持していた社会契約説を否定して、社会の維持に必要な法が、人間の意志や社会における結合以前に存在することを主張し、その法の内容を明らかにすることである。このような彼のアプローチには、フィジオクラートの自然的秩序論との共通点を見出すことができる。同時に本書は、フィジオクラートの経済学説の批判から議論を始めている。イスナールによれば、彼らの誤りはつぎの4つの命題にある。

- ①農業は富の唯一の源泉である。
- ②インダストリイは、富を増加させない。
- ③税は、土地の生産物だけに課せられるべきである。
- ④君主は純生産物の共同所有者である。

その誤りの理由についてのイスナールのここでの説明は、独創的で興味深い。もしフィジオクラートが言うように、土地が富の唯一の源泉であれば、すべてのものを社会の成員間で平等に分配すれば事足りる。当然のことながら、イスナールはフィジオクラートの主張する合法的専制には反対である。イスナールによれば、富はインダストリイや労働によって増産可能であるという事実が、このような単純な社会の存立を不可能にする。人は最小の労働と最小の費用で、最大限のものを享受しようとするという傾向を持ち始めるからである。イスナールは、純生産物を生み出さない富はないことを主張する。土地が生み出す富と、インダストリイが生み出す富がどのように価値を獲得し、それらの富がどのように交換されるのか、この二つの富の価値を相互間で比較することによって、それらの法則を明らかにするのが『富論』のねらいである。

イスナールは、富を「生産に使用される富」と「消費に使用される富」の2種類に分ける。一般的な富の増大のために、できるだけ多くの富を生産に向けるべきであるが、その際には、費用最小化の原則に従わねばならない。すべての生産物のうち、生産に向けられる部分が生産費用にあたる部分となり、他の部分が「自由に処分可能」(disponible)な部分すなわち剰余となる。イスナールは、生活資料の生産、すなわち農業が、すべての生産物の源泉となりうるという理由で、農業の重要性を説き、「インダストリイは農業の娘」と表現している。土地の耕作を軽視すると、一国

の繁栄は誤った方向に導かれることも指摘する。しかしこの農業重視は、フィジオクラートとは一線を画す。農業のみが純生産物をうみだすというフィジオクラートの主張を否定し、イスナールは、すべての富が、純生産物 (produit net) すなわち剰余を生み出すことを強調する。ここで注目すべきは、イスナールは、剰余を、費用を上回る生産物と定義し、まずは物量タームで示している。そして本書の主要部分をしめる、イスナールの連立方程式は、農業部門以外にも剰余が発生する一般的可能性を示すことを最大の目的としているのである。

(3) ワルラスがイスナールから受けた影響  
ワルラスがイスナールに直接言及したのは、1878年にジェヴォンズと一緒に数理経済学の先駆者たちのリストを作成した際のみである。それ以外の著作には、ジャップフェも指摘するように、イスナールへの言及は一切ない。これは父親のオーギュストについてもあてはまる。ジェヴォンズが『経済学の理論』の第2版に付け加えるために作成したリストに、イスナールを付け加えたのはワルラスである。それは、1878年12月に『ジュルナル・デ・ゼコノミスト』に掲載された。

イスナールが交換方程式において、効用を一切言及しなかったのとは対照的に、ワルラスは、稀少性(限界効用)の比として、交換価値を表現した。この点が、ワルラスの大きな貢献であるが、富の分類、連立方程式の使用、価値尺度財の採用、純収入率の価格決定など、その他の多くの分析道具を両者が共有するのは、確かである。

しかしながらワルラスが一般均衡理論を構築する際に、イスナールの方程式に影響を受けたか否かについては、実はジャップフェ自身も認めているとおり、明白な証拠はない。ジャップフェの言うように、ワルラスの蔵書には、このイスナールの『富論』が含まれるので、この著書の存在を、自らの純粋経済学に取りかかる以前から知っていた可能性はある。現在ローザンヌ大学が所蔵しているワルラスの蔵書(ワルラス文庫)を直接確認したが、イスナールの『富論』には、方程式が展開されている頁も含めて、一切書き込みがなく、非常に保存状態がよかった。他の蔵書と比較しても、少なくともこの蔵書からは、ワルラスが『富論』に一生懸命とりくんだという形跡を感じ取ることはできなかった。

(4) イスナールとワルラスの決定的相違点  
既にみたように、イスナールの連立方程式の意図は、土地以外の富が剰余を生み出す可能性を示すことであり、税はその剰余部分に課せられるべきことを主張することであった。そこでは、労働者も費用すなわち生存水準以上の賃金を受け取る可能性がしめされており、当然のことながら、税は、このような賃

金にもかされるべきというのがイスナールの主張である。

それに対して、オーギュストとレオン・ワルラス父子は、社会がどのような状況にあっても(人口増加と資本蓄積がすすんでも衰退しても)、労働者の受け取る賃金は、つねに一定であることを理由に、労賃の免税を主張する。また社会が進歩すれば、利子率は低下し、資本家の地位も低下し、地代と地価の上昇により、得をするのは地主だけであることから、条件の平等を確保するために、土地の国有化を主張した。これにより、地代が国庫収入となれば、労賃のみならずすべての税を廃止することができる。

この進歩する社会の3階級の分配法則の証明こそが、レオン・ワルラスの純粋経済学設立の目的である。

土地国有化とそれに伴う税制の撤廃を最初に主張したオーギュストは、イスナールが批判的としていた、フィジオクラートの土地単一税を高く評価していた。このオーギュストの主張は、レオン・ワルラスの社会経済学として結実した。息子のレオン同様、オーギュストの文献にも、イスナールへの直接的な言及はないが、ワルラス父子のフィジオクラート観を知ることは、イスナールと彼らとの違いを知る上で有益であろう。

父オーギュストは「税の廃止について」(1830)という論文の中ですでに、土地の国有化とそれにとまなうすべての税制の廃止という、それ以降のワルラス父子の柱となる思想を展開している。そこで彼は、自らの主張とフィジオクラートの土地単一税の思想との一致を強調している。両者の違いはつぎの2点であるという。

第1点目は、オーギュストが、地代収入は、君主が受け取るのではなく、すべて国庫収入に当てられることを主張している点、第2点目は、オーギュストが、すべての富が土地から生まれるという命題を否定し、インダストリーもまた富を生み出すということを主張している点である。

オーギュスト・ワルラスは、農業生産物に偏ったフィジオクラートの富観にたしかに批判的であるが、アダム・スミスによる批判とは一線を画している。オーギュストは、土地の生産物のみを富としたフィジオクラートを批判するが、労働生産物のみを富としたアダム・スミスに対しても同じように批判するのである。

スミスとケネーは結合されるべきだと、オーギュストは言う。土地と労働は、二つの根源的な富だからである。土地の価値があるとすれば、それは稀少性をもつからであり、土地と労働はともに希少な効用をうみだすのである。イギリス古典派やマルクスとは違い、オーギュストにとって、ケネーの富観はスミ

スによって乗り越えられたのではなく、二人の考え方は同列に扱われるべきものなのである。土地と、労働・インダストリイは、同列の富であり、それらは共同して生産に寄与する。富の価値を労働のみに還元することはできない。

オーギュストは、このようにフィジオクラートとアダム・スミスの富観を統合することによって、自らの新しい経済学の構築が可能になると考えていた。交換価値の理論〔純粹経済学〕は、この二つの富を、同次元で扱うものである。しかし、そのことが、二つの富を全く同質のものに還元して扱うことを意味しているのではない。この点は、フィジオクラート批判のために、両者の共通点〔剰余を生み出す〕を強調しようとしたイスナールとワルラス父子の決定的な議論の方向性の違いであろう。

このようなオーギュストの主張は、レオン・ワルラスの処女作『経済学と正義』（1860）に受け継がれた。

#### （5）結論

一般均衡理論的な枠組みによって、イスナールが意図したことは、土地も資本も人的能力の、同じく剰余を生み出す可能性があるということを示すことであった。ワルラスは逆に、同じアプローチによって、土地のみが持つ特殊性を示そうとした。前者は、フィジオクラートの土地単一税を批判するために経済理論を構築し、後者は、社会の進歩にともなう土地の稀少性の上昇、それがもたらす地価と地代の上昇を示し、あくまでも土地の特殊性を主張するという点で、フィジオクラートと共通点をもつ。

このように、ワルラスとイスナールの富観やそれに基づく社会ヴィジョンや政策的意図における決定的違いは、一般均衡理論の形成過程の一部として両者の経済理論を比較検討するだけでは、決して明らかにすることはできない。両者における連続と断絶を明らかにしてこそ、ワルラス経済学の思想的意義をより明確にし、一般均衡理論の思想的起源に新しい光を投げかけることができるのである。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

- ① 御崎加代子「ワルラスの経済学史観－純粹・応用・社会経済学の起源」『彦根論叢』査読無 第383号 2010年（掲載予定）
- ② 御崎加代子「ワルラスとイスナール－経済学史における連続と断絶」『滋賀大学経済学部研究年報』査読無 第16巻 2009年 pp.101-112.

〔学会発表〕（計1件）

- ① 御崎加代子「ワルラスとイスナール：もう一つのフランスの伝統」経済学史学会 第72回全国大会 2008年5月24日 愛媛大学

〔図書〕（計0件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

御崎 加代子 (MISAKI KAYOKO)  
滋賀大学・経済学部・教授  
研究者番号：90242362

##### (2) 研究分担者

なし

##### (3) 連携研究者

なし